

今年度も生徒を主役にした熱いドラマが始まった。「北海道にある元気まち」をキャッチフレーズに北海道の南西部（噴火湾沿い）に位置する人口約二万一〇〇〇人の白老町。その東西二八kmに延びる市街地の東側に本校はある。

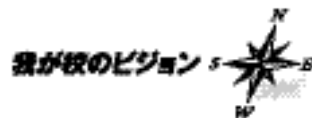
どんな学校を創るか

思いの共有化

「いい教育活動がしたい！いい学校づくりがしたい」。新年度計画会議の終わりに全教職員に向けて発した私の思いである。非常に漠然としたひと言であるが、今年度の学校づくりに寄せる私の凝縮された思いであった。今年度の学校経営方針は次のようなものである。

子ども達の中に潜む「いらだち」、「不安」、「自己喪失感」などと、それらに相對するよう同居する「生命」、「生き方」への問いへの叫びをしっかりと受け止め、豊かで温かな人間関係の中で一人ひとりの発達課題を明確にする。また、その課題解決への方策を支援することにより、「人間の尊厳」や「自己肯定心情」、そして「問題解決力」、「連帯感」、「自己指導力」といった自立する生きる力を獲得させ、「生きる」ということへの希望を育むこと。

何よりも子ども達はそれぞれちがう個性と



「いい」学校を創る - 真の同僚性と授業づくり -



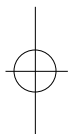
北海道白老町立白老中学校長
古俣 博之

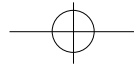
特性を持っていることを深く認識し、「子ども一人ひとりとはみなちがうかけがえのない存在」であることを本校の教育の基底にしっかりと据えること。

これまで以上に子どもに内在する自立の種を芽吹かせ、自らの手で自立の花を咲かせることができる力を獲得させるための豊かな学びを全教育活動の中で展開すること。

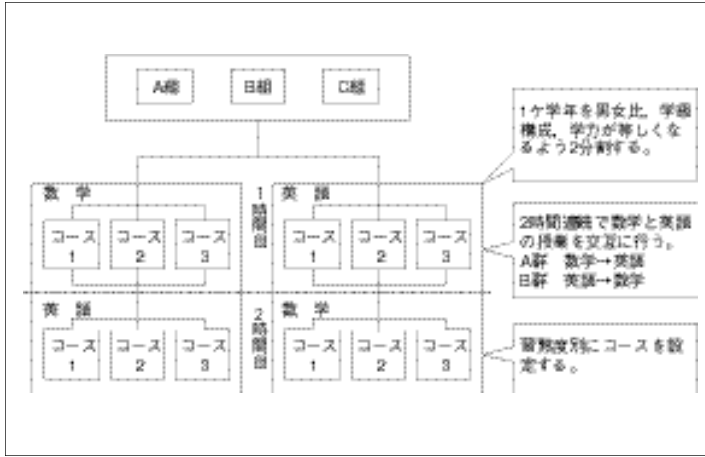
そして経営の信条を、「生徒のために学校がある」、「教職員の氏名を基盤として学校がある」、「保護者、地域住民の理解と協力を支えられて学校がある」とし、目指す学校・生徒・教職員のイメージを示しながら、今年度の重点事項（今年度本校が目指す教育）を二つ掲げた。一つは「生徒一人ひとりを主役（大切に）する、中心に据える」にし、自立する力を育む教育活動の実践」。もう一つは「発信・受信機能が充実した開かれ信頼される学校運営の推進」である。具体的な方策を二つ述べたい。

どこの学校でも行われている年度末反省に向けての意識化を早め、その内容的な充実を図るために一ヶ月末には、私の方から次年度の教育課程編成に向けての大きな方針と、それを踏まえて、各校務・学年部会に具体的計画についての問いかけを行う。それは今年度の「ふり返り」とそれを基に





資料 コース学習の編成と実施



した「方向性」の意識化を強め、P D C A サイクルの実質化と次年度の学校づくりのイメージ化を図りたいとの思いからである。年二回の学校評価（教職員、生徒、保護者、地域住民を対象）の実施である。それは実践に対する課題把握の早期化と工夫改善のスピード化を図り、より開かれ信頼される学校運営を展開するためである。また、そ

れは、どんな学校を創り出すかという方策を求める協働性を醸成することになるのである。学校評価の実施に当たっては、前述したねらいに近づくために、評価項目検討から用紙の回収、集計、成果と課題の把握結果の分析・考察、方策（工夫改善策）提示等の一連の流れの中に学年、校務分掌、全体での機能を生かし、幾重にもそれらの声を交錯させる。

生徒の意欲的な学習を促す授業をどう創るか 確かな学力の獲得化

学校が本来の機能を果たし、生徒たちにとって魅力的な場になるための第一条件は、何と云っても楽しく、分かる授業が行われることであり、その中で生徒一人一人が存在感を認められ、「できた」「分かった」「やってみよう」という学びの実感をもてることである。

本校においては平成一四年度、様々な生徒の問題行動が起きている中で、こと学習に対する実態に視点を当てた時浮かび上がったのは、次のことである。

- 積極的に学習に取り組む姿勢が弱い。
 - 学習状況の把握がしっかりとされていない生徒が多い。
 - 基礎・基本がしっかりと定着していない生徒が多い。
- これらのことから、授業における生徒指導

の機能を向上させ、「どの子にも楽しく、分かる授業」の創造こそ問題解決の切り口であると結論付けたのである。そして、習熟の差が大きい数学と英語において基礎・基本の定着を確実に図るために「習熟度別少人数授業（本校では「数・英コース学習」と呼ぶ）」を展開するとともに、「教科シラバス」「教科マニフェスト」の作成、活用を通して、生徒が生氣れる眼差しで授業にのぞむ授業づくりを実践研究した。「数・英コース学習」について、資料を参照いただきたい。コース選択については「選択お助けテスト」の実施や、教師によるアドバイスもあるが、最終的には生徒自身がコースを決定することを大切にしている。

この春も子どもたちはあふれる涙と三年間の思い出をいっぱい抱えて巣立っていった。その姿に万感の思いを重ね、いい学校を創らねばとまた強く思う。公立の一中学校としての明確な教育理念と実践課題、そして具体的な実践方法等を教職員と共有することは非常に大切なことであり、そのことが組織としての真の同僚性、協働性、機能性等を生み出す。その総体的な力、学校力が明日に生きる自立した力をもった子どもたちを大きく育てることになると日々の実践を通して確信している。

